

解 答

一

問一 イ 分裂 ロ 訪（れて） ハ くわだ（て） ニ 発揮 ホ たく（して）

問二 A ウ B オ C イ

問三 エ

問四 ② 過剰 ③ 貧困

問五 テクノロジーやメディアが、人間の想像力を弱めること。

問六 どんなイメージも共有されているような世界

問七 ア × イ × ウ × エ ○

二

問一 イ 地盤 ロ 茎 ハ 歓声 ニ 盛（り） ホ 易（かった）

問二 冬

問三 こっそり書くところ。

問四 どうやって～のプロセス

問五 イ

問六 自分が中学

問七 ウ

問八 イ

解 説

一

問一 イ 「一つのものがいくつかに分かれること」の意味の「分裂」。

ロ 「ある季節やようすになる」の意味の「訪」れる。

ハ 「計画を立てる」の意味の「企」てる。

ニ 「持っている力を出すこと」の意味の「発揮」。

ホ 「人にたのんで、仕事や用事、伝言などを任せる」の意味の「託」す。

問二 A 空欄後の「ても」に呼応する「いくら」を入れます。

B 「もし…たら」の形になることに着目します。

C 「もちろん」の後に逆接の接続語が続くことが多いので注意します。「けど」の後に筆者の言いたいことが記されています。

問三 空欄直後の、「自分が本当に欲しいものがわからなくなった」に着目して、「情報が与えられ、大量のイメージが与えられることによって失われるもの」＝「欲望」がなくなったと同じ意味を持つ選択肢を探します。

問四 前の文を言いかえています。「イメージをあまりに大量に与えられすぎる」＝イメージの「過剰」、「自分でイメージをつくり出す力を次第に使わなくなっていってしまう」＝イメージの「貧困」を生み出す。

問五 人間の補助となるべきものがかえって危難を引き起こすこと、つまり、大量のイメージによってかえって人間の想像力が弱まることを説明します。

問六 「そこ」が「～世界」を指すことに着目します。「どんなイメージも共有されているような世界」では、指示語の後のように、「それぞれの人がもつ単独性は失われて、みんなが、誰でもない、なんとなく『みんな』みたいな存在になってしまう」のです。

問七 ア たとえば「ラスコーの壁画」のような、「書かれた文字や、人から聞く話でしか物事を伝えられない時代に描かれた」、「太古の昔の絵画」は、「現前の知覚に与えられていない物事の心象（イメージ）を心に浮べる」ことによって生まれたものが多く、「実際の姿を写實的に描いたのではなく、それ自体、想像にもとづいて描かれた」とあるので、「実物をすべて見ていながらも」の部分不適切です。

イ 「フロイト」は、「人びと」が「想像したり考えたりする『ノウハウ』を、テクノロジーや文化産業に依存するようになった」結果として「象徴的貧困」の状態に陥り、そこから「危難」を引き起こすであろうことを、「補助具をつけた神」のたとえで「警鐘を鳴らした」のです。『『補助具』の開発』そのものに「懸念を抱」いているわけではありませんので不適切です。

ウ 「どんなイメージも共有されているような世界」では「それぞれの人がもつ単独性は失われ」、「他の人の経験やそのときの気持ち」を「おしはかる」ことができなくなってしまうとありますから、「互いに相手を理解し合える社会が成立する」は不適切です。

エ 「想像力とは、人びとの『未来』を成り立たせている『心のエネルギー資源』でもある」というまとめと一致します。

二

問一 イ 「建物などの土台となる土地」の意味の「地盤」。

ロ 「植物で、花や葉、実を支えている部分」の意味の「茎」。

ハ 「喜んで上げるさけび声」の意味の「歓声」。

ニ 「気分が高まる」の意味の「盛」り上がる。

ホ 「容易」の意味の「易」い。

問二 「変色した葉の隙間から、微妙な陽光が漏れ」、「かろうじて残った貧しい実」という表現から、「現在」が「秋」であることがわかりますから、「冬」に向かう季節と答えます。

問三 「詩なんてこっそり書くもので、～わたしは秘密だった。」という表現から、自分の内側にしまっておくべきものを、詩として書き表すこと自体を、本来は「秘密」にし、「こっそり」と活動しなくてはならないような、一種の「悪事」ととらえています。文末を「～ところ。」の形でまとめましょう。

問四 「それ」は、傍線の前の文、「図書館に行って、～本に紹介されていたから、と言う者もいた。」を指すと考え、字数条件に合う、同様の表現を他の部分から探します。「それ」を「聞く」と、さらに前の文の「たずねる」が同義である点に着目して、「どうやって、この詩に行き着いたのか、そのプロセス」を抜き出します。

問五 「唯一、～人間に許された」という表現から、「詩」を「神聖なもの」と考えているととらえます。

問六 「伴走者のいない孤独な読書の道のり」の具体的な内容を説明している、「自分が中学生のころは、」で始まる、読書体験の過程を示した一文を探します。

問七 現代仮名遣いでは「しづかに」と表記するところを歴史的仮名遣い「しづかに」としているので「文語詩」、全体が「七五調」のリズムであることから「定型詩」と判断します。

問八 「あてはまらないもの」を探します。「朗読会」が個々の生徒それぞれのいつもと違う面を発見する体験となり、新たな関係が生まれたとは言えますが、「一つにまとまることができた」というのはあてはまりませんので、イは不適切です。